

陶郷の景色

のどかで明るい焼き物の里

古くから焼き物が盛んだった
砥部。小鳥のさえずりに耳を傾け
ながらそぞろ歩けば、みかん畑の
中に窯元を見つめます。普段つかい
の器として愛用される砥部焼は、
こんなどかで明るい里山から
生まれます。

さわやかな砥部焼カラーと 焼き物産地の原風景

ぽってりとなめらかな白磁に、味のある藍色の染付。一つひとつ丹精込めて作られるからでしょう、どこか温かで素朴な雰囲気をもっています。

砥部焼は、原料から出来上がりまでのほとんどを、町内でまかなっています。原料の陶石が掘り出されるのは広田地区の上尾峠^{うえびとろげ}。上尾陶石を細かく砕いて作られた坯土は、ほとんどの窯元で使われています。

昔は薪を使って焼きました。斜面を利用して築かれた登り窯は、炎が上へのぼっていく原理を利用して効率的に焼き上げるもの。燃料は戦後になって灯油や重油にかわり、現在は、ガス窯や電気窯が主流になっています。

町内には、レンガ造りの登り窯や、薪・灯油・重油時代をしのぶ煙突が、あちこちに残っています。

素朴な里山には、白と青のすがすがしい砥部焼カラーの中に、ノスタルジーあふれる焼き物産地の原風景が、顔をのぞかせているのです。

大南から北（松山方向）を向いて町内を一望する



01



02



03



04

- 01 陶祖ヶ丘の古陶碑は時代ごとに砥部焼の変遷がわかる
- 02 窯焼きを待つ器たち
- 03 往時をしのぶ煉瓦造りの煙突。ウメノ青興陶園
- 04 砥部焼は高温で焼かれる

Tobe Pottery created in pastoral Satoyama

Most of the processes that comprise Tobe pottery from gathering raw materials to finishing are performed within Tobe Town. Throughout Tobe Town, in the refreshing Tobe pottery colors of blue and white, we can see in the nostalgic landscape climbing kilns made of bricks and chimneys used in old times.

True Value of Tobe Pottery

Thick and full bodied Tobe pottery is simple and warm-feeling. Tobe pottery artisans carefully create shapes one by one and the patterns of wild grass and other patterns are traditionally painted in deep indigo blue.

太陽文

優しい風合いで人気



なずな文

古砥部の文様をアレンジ



唐草文

大胆なデザインで
砥部焼を代表する文様



赤絵菊文

自然のなにげない美しさが
際立つ

とくさもん
十草文

シンプルで味わい深い



砥部真骨頂の

温かみのある器に清楚な藍の文様
暮らしに寄りそう砥部焼の器

厚みがあり

丈夫で使いやすい器

土から作られる陶器とは異なり、石を原料に高熱で焼き上げられる磁器には、薄手でシャープな印象がありますが、同じ磁器でありながら、砥部焼にはゆったりとした素朴な味わいがあります。

他産地にはみられない厚手の素地は、少々なことではびくともしない頼もしさを感じさせ、また、その厚みにふさわしいぽってりとした優しい形は、思わず手にとりたくなる魅力を秘めています。



自然の生命を活写した さまざまな文様

砥部焼には自然をモチーフにしたデザインがしばしば描かれます。新たな季節の訪れを知らせるように、野原や道ばたでひっそりと咲く花たち。その可憐な姿を、職人たちが一筆一筆、丹念に器に描き出します。

自然の姿をそのまま写し取ったもの、大胆にデフォルメしたものなど文様はさまざまですが、いずれも躍動する自然の息吹にあふれ、毎日の食卓に花を添えます。

また、最近では若手や女性作家も増えており、新鮮な感性から生まれる斬新な文様が、砥部焼に新たな魅力をもたらしています。

伝統色の清楚な藍色は 窯ごとに調整

すっきりと清々しい白磁の肌に溶け込んだ渋味がかかった藍の色。昔から砥部では「呉須」と呼ばれる顔料が絵付けに使われてきました。

呉須は酸化コバルト、マンガン、鉄などを含む天然鉱物の顔料で、焼成法によって色合いが変わります。そのため、窯元は自家の器に最も適した色を作りだすための調整を行っています。



05



03



01



06



04



02

- 01 厚くて丸い縁をした「玉縁鉢」^{たまふちばち}。実用性に美を秘めている
02 高台が大きい独特の飯碗「くらわんか」
03～06 無形文化財技術保持者の作品



第一章

陶郷の景色

01



03

陶里の条件を備えた土地

砥部焼は磁器から始まったと思われるが、磁器以前に陶器の時代がありました。



02

草創期からの ドラマをたどる

焼き物に適した土が産出されただけでなく、窯を焚く燃料となるアカマツが周囲に豊富だったこと、登り窯を築くのに最適な傾斜地が町の各所にあったことなど、焼き物に適した条件を備えたこの地で器づくりが始まったのはごく自然なことでした。

陶器としての砥部焼の名が最初に文献に現れるのは元文5年（1740）ですが、北川毛の古窯跡から出土した壺や皿などに鉄絵具で絵付けされた陶器が見られることから、砥部焼は陶器から始まったことが分かっています。

世界に飛躍した明治・大正期

磁器の生産は大洲藩の時代に始まりました。財政状況の厳しかった大洲藩は、当時盛んに外山で産出されていた砥石の屑で磁器を作ることを、杉野丈助に命じました。九州に陶工を送るなどして工法を探るものの、技術は門外不出とされたために失敗を重ねましたが、安永6年（1777）、ついに白磁の焼成に成功。その後、川登で陶石が発見されて大量生産が可能になり、原料や窯の改良などが進められました。

明治期に砥部焼は飛躍的に発展します。五松斎窯の錦手や、シカゴ世界博で一等を受賞した愛山窯の淡黄磁などで世界にその名が広まり、生産量の約7割が東南アジア、インド、オーストラリア、アメリカなどに輸出されるといふ繁栄ぶりでした。製陶業に従事する住民も多く、砥部の街はおおいにぎわいました。

民芸作家のアドバイスで復興

昭和初期の世界的な大不況とそれに続く第一次世界大戦の敗北で、他産地同様、砥部も壊滅的な打撃を受けました。そのような状況の中で、戦地から戻った陶工たちは花器や置物などの生産に活路を求めました。

民芸運動家の柳宗悦、バーナード・リーチの昭和28年の来砥に続いて、濱田庄司、富本憲吉らが砥部を訪れ、大量生産にはない手仕事の良さを砥部焼に見いだしました。大量生産ではなく、ロクロと手描きによる磁器づくりを」という彼らのアドバイスに砥部焼の未来を託した陶工たちは、グループを作って研究を重ね、技術を磨きました。民芸家たちも力のある指導者を砥部に送りこんで、復興を助けたのです。

伝統的な文様を大胆なタッチでアレンジした磁器は、折からの民芸ブームにも助けられ、砥部焼として定着。昭和51年には国の伝統的工芸品に指定されました。東京での展示販売をきっかけに、素朴で温もりのある器は都会の人々に好意的に受け入れられ、全国的な知名度を得たのです。



- 01 登り窯の絵（初代・中元竹山の筆による）
- 02 陶祖ヶ丘の杉野丈助の碑。毎年4月に陶祖祭が行われる
- 03 北川毛窯から出土した江戸中期の鉄絵陶器
- 04 昭和28年に砥部を訪れた民芸運動家の柳宗悦
- 05 江戸時代の手描き染付。呉須のブルーが味わい深い
- 06,09 明治時代、五松斎窯では九州有田から陶工を招いて錦手が作られた
- 07,10 型絵で文様を施す印判手（明治時代）
- 08 向井和平（愛山窯）の淡黄磁は品のある象牙色が特徴（明治時代）

Dramas from the Founding Period

Tobe pottery started as earthenware in the 18th century, under the control of the Ozu Domain. During the Meiji era, Tobe pottery was actively exported, but suffered a significant decline due to World War II. Nevertheless, it was revitalized at the suggestion of Yanagi Muneyoshi and Bernard Leach, famous for their folk art movement.



まちかど アートギャラ

砥部町は、古くからある
焼き物の里ですが、まちかどに
はさまざまなモニュメントが
あり、ギャラリーさながらの
観を呈しています。現代アート
の香りに満ちたユニークな
オブジェは未来への予感も
感じさせて、飽きることが
ありません。誌上でアート
の旅をお楽しみください。





学びと体験の場



01



03



02



04

- 01 砥部焼伝統産業会館 1 階常設コーナーはスタイリッシュなディスプレイが目をひく。2 階では約 80 の窯元の作品を展示販売している
- 02 砥部焼の歴史などが学習できる砥部焼伝統産業会館
- 03 陶工気分を満喫できる砥部町陶芸創作館
- 04 陶芸創作館では好きな器に絵付けができる。ロクロ、手びねりコースは予約が必要
- 05 ロクロで作った磁器では国内最大級といわれる砥部焼の地球儀。外国人来館者には、地球儀上に出身国を示すシールを貼ってもらう

皿、茶碗、マグカップなどおよそ 100 種の素焼が揃い、好みの器に絵を付けることができます。赤ちゃんの記念手形や、寄せ書きなどに活用する人も。本格的な創作を希望する人には、ロクロと手びねりのコースもあり、世界に一つのオリジナル作品を作ることができます。

砥部町陶芸創作館は、絵付けやロクロの体験ができる施設です。

皿、茶碗、マグカップなどおよそ 100 種の素焼が揃い、好みの器に絵を付けることができます。赤ちゃんの記念手形や、寄せ書きなどに活用する人も。本格的な創作を希望する人には、ロクロと手びねりのコースもあり、世界に一つのオリジナル作品を作ることができます。

砥部焼伝統産業会館は平成元年にオープンした砥部焼の中核拠点です。国の伝統的工芸品である砥部焼の紹介と共に、窯元に発表の場を提供しています。

創作の楽しみを味わう

砥部焼伝統産業会館
砥部町陶芸創作館



05

The Main Facilities and Events Celebrating Tobe Pottery

The Tobe Pottery Traditional Industry Hall serves as the base for promotion and tourism of Tobe pottery and the Tobe Town Pottery Art Creation Hall is where you can try painting and taking a turn at the potter's wheel. The bi-annual Tobe Pottery Festival held in spring and autumn becomes crowded with many people.

町が大にぎわいする日



01



04



03



02



06



05



07

- 01,02 砥部焼まつりは毎年4月第3土・日に開催。即売のほか、新作展や特産品販売なども行われ、常連客も多い
- 03,04,06 窯元にとって砥部焼まつりは、消費者の動向を知る好機にも
- 05 砥部焼伝統産業会館前では砥部焼オークションを開催
- 07 女性作家たちのグループ「とべりて」のブース。女性らしいしなやかな発想が光る

砥部焼まつり

ファン待望の一大イベント

昭和59年にスタートした砥部焼まつりは、4月第3土・日曜に行われ、毎年10万人近い人でにぎわいます。陶街道ゆとり公園を主会場に、砥部焼伝統産業会館、砥部町商工会館などで、約100軒の窯元が10万点におよぶ砥部焼を展示販売します。新作展、オークションなどイベントも多彩。なお、11月最初の土・日曜に伝統産業会館周辺で開催される「秋の砥部焼まつり」では、窯元による対面販売が好評です。